

令和元年6月22日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02215

研究課題名(和文)ギリシア教父におけるプラトン主義的「神に似ること」概念の受容史研究

研究課題名(英文) A Study of the Historical Influence of the Platonic Notion of 'Becoming like God' on Greek Patristic Thought

研究代表者

土橋 茂樹 (Tsuchihashi, Shigeki)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：80207399

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：プラトンの主要対話篇で主題化され、その後、古代末期から中世初期にまで継承された、「神に似ること」を人間本性の完成とみなすプラトン主義的な伝統が、初期キリスト教思想にどのような影響を与え、いかなる変容を被ったかを、主要文献に即して検証・考察し得たこと、また、先行研究を通史的かつ領域横断的に再考し、「神に似ること」というギリシア的理念が「キリストに倣うこと」(imitatio Christi)という新たなパラダイムへと変容しつつも併存していく力動的な経緯を詳細に跡づけられたこと、さらにそれらの成果の一部を既に公刊し得たこと、以上が本研究の主たる成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ギリシア教父たちによる古代ギリシア哲学の受容史という観点から、「神に似ること」というプラトン主義的伝統が東方キリスト教的文脈においてどのように変容・展開されてきたかという今まであまり語られることのなかったもう一つの思想史の系譜が、キリスト教信仰において極めて重要な課題である「キリストに倣うこと」という神学的な概念との比較考察を介して、具体的に文献学的に跡づけられ、神への超越の志向と隣人愛による社会実践の志向の総合的展開として解明された点が、本研究の最大の特徴であり、思想史研究上の意義である。

研究成果の概要(英文)：This study clarifies the historical influence of the Platonic tradition, which regards the goal of human life as 'becoming like God' (homoiosis theoi), on Greek patristic thought. The essential point of this study is to show that Gregory of Nyssa reinterprets or modifies the Platonic notion of 'likeness to God' by the Christian notion of 'imitatio Christi', that is imitating the virtue of the incarnated Christ's 'modesty'. Some papers have already presented as a part of its results.

研究分野：哲学・思想史

キーワード：ギリシア教父 プラトン主義 神化 徳 「神に似ること」

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景としては、古代ギリシア哲学諸派における「神に似ること」(*homoioōsis theōi*) という概念の位置付けを解明した個別文献研究(以下の a)と、「神に似ること」の意味がキリスト教の文脈の中でどのように変容していったかを追跡した通史的研究(以下の b)の二種に分けることができる。

(a) 「神に似ること」という概念を個々の哲学者に内在的に考察する研究としては、「魂の浄化」を「神に似ること」とみなす『テアイテトス』(176a-b)や『パイドン』(69b-c)に関する従来の超越志向のプラトン解釈に加え、『国家』を中心に「神に似ること」という概念とイデア論との関係を問い直した D. Runia (2013) のプラトン研究や、「神に似る」ために市民徳ではなく浄化徳が必要だとするプロティノス (*Ennead* I.2) の立場をむしろ市民徳の重要性を強調する立場から反論した J. Annas (1999) のヘレニズム思想研究が反-超越志向的な重要な論点を提示している。

他方、(b) 「神に似ること」という概念そのものを主題とした通史的研究としては、ニュッサのグレゴリオスにおける「神に似ること」概念の受容の内実を論じた H. Merki (1952) の研究が、グレゴリオスにおける類似概念である「神の分有」(*metousia theou*) を考察した D. L. Balás (1966) と並んで未だに他の追隨を許さぬスタンダードである。そのような中で、「神に似ること」という超越志向的なプラトン主義的伝統の変容を、グレゴリオス『至福について』におけるキリストの「へりくだり」(*tapeinophrosynē*) の徳の強調に見出そうとした点で、A. Meredith (2000) が現世内在的な新たな論述地平を切り拓いた。しかし、残念ながら Meredith の論点を Merki のような通史的・包括的観点から詳細なテキスト分析に基づいて展開する専門研究書はまだ現れていない。

## 2. 研究の目的

上述のような研究現況を踏まえ、本研究が研究期間内に目指すのは、以下の諸段階である。

- (1) 「神に似ること」という概念のプラトン(主義)的文脈での理解。
- (2) 「神に似ること」概念がギリシア教父へと受容された経緯の検証。
- (3) 「キリストに倣うこと」という概念がいつ、誰の著作に現れ、それがどのように継承されていったかの検証。
- (4) 「神に似ること」と「キリストに倣うこと」との関係は排他的選言的か、それとも両立可能、あるいは相補的か、という点の考察。
- (5) 「神に似ること」から「キリストに倣うこと」へと焦点が移ることによって「三一神」、「人間」、「徳」、「救済」、「修道」理解が各教父においてどのように変容・刷新されたか、という補完的研究。
- (6) 以上の各段階を踏まえた上で、本研究は、最終的に「神に似ること」と「キリストに倣うこと」と、つまり超越と内在の相反する方向性が、たとえ前者から後者への強調の移行があるにもかかわらず、なお併存し両立することを明らかにし、それをもって今後なされるべきギリシア教父(東方キリスト教)固有の三位一体論的神理解とキリスト論的人間理解の端緒とするものである。

## 3. 研究の方法

本研究を進めるにあたっての各年度の計画・方法は以下である。

- (1) 初年度は以下の 4 種の研究活動を行う。まず 予備的考察として、古代ギリシア哲学における「神」概念の諸相を把握するために、様々な伝統的「神」概念の用法を追跡調査し、プ

ラトン諸対話篇における「神に似ること」概念が、どのような文脈でいかなる目的のために用いられ、またその背景にいかなる哲学的「神」概念が見出され得るかを、各対話篇の原典および枢要な注釈書において重点的に考察する。次いで プロティノスにおける「神に似ること」及び「神」概念の継承の実態と変容の可能性を哲学的に探索する。その上で新プラトン主義の系譜と他のヘレニズム期諸学派とを比較考証することによって、ヘレニズム期における同概念の受容ないし変容実態の総合的解明が試みられる。以上において、「神に似ること」のためにいかなる「徳」が(たとえば、市民的徳と浄化的徳が区別されたように)要請されていたかを、それぞれの徳が必要とされた文脈と関連付けることによって具体的かつ詳細に跡づける。

(2) 次年度は以下の4種の研究活動を行う。古代ギリシア世界における「神」観と、古代末期のキリスト教が登場して以降の、とりわけ異教圏における一神教的「神」観とを予備考察的にサーベイする。その上でプラトン主義の影響を色濃く受けたフィロンやオリゲネスを中心に、プラトン起源の「神に似ること」概念が東方キリスト教圏においても受容、継承されている実態を文献から読み取り考証する。さらにカッパドキア三教父の膨大な文献群の中から「神に似ること」の用法分析を行い、彼らにおいてプラトン起源の「神に似ること」の伝統がどのように継承され、また変容されていったのかを詳細に調査し、それぞれの事例のもつ意味を総合的な見地から解明する。それに伴い、神に似るためにどのような「徳」が要請されたかという論点についても、上記文献調査と並行して、「神に似ること」概念の継承ないし変容過程に応じた徳概念の変容として明確に把握した上で、ギリシア教父に固有な「徳」理解の特定を試みる。

(3) 最終年度は以下の3種の研究活動を行う。カッパドキア教父における「キリストに倣うこと」の概念の起源を確証する。その上で、「キリストに倣うこと」が「神に似ること」の延長線上に置かれるべき理念なのか、それとも「神に似ること」とはまったく別の文脈における人間の理想像(=人間性の完成)として理解されるべきなのかを、当該文献から可能な限り明確に解明することを目指す。その上で「キリストに倣うこと」のために要請される「徳」の観念と、「神に似ること」のために従来要請されてきた「徳」観念との間には、いかなる相違/連続性があるのか、またそのことによる人間性の完成に関する理念にはどのような相違/連続性があるのか、その点に関する哲学的解明を試みる。さらにカッパドキア三教父の全テキストにおいて、「神に似ること」と「キリストに倣うこと」という二つの鍵概念(及びその派生概念)の相互関連とそれが見出される文脈が、果たして両立可能な形で併存しているのか、それとも前者から後者への移行が見出されるのか、その点を個々の用例解釈を行いつつ探求する。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究の初年度として以下の4種の研究成果を得た。

予備的考察として、ホメロス、ヘロドトスからソクラテス以前の哲学者に至るまでの様々な伝統的「神」概念の用法を研究調査することによって、古代ギリシア哲学における「神」概念の諸相を原典から確認することができ、大きな成果を得ることができた。

プラトン『パイドン』『国家』『テアイテトス』における「神に似ること」という概念を重点的に考察することによって、その概念がどのような文脈でいかなる目的のために用いられたのか、またその背景にいかなる哲学的「神」概念が前提されていたのかをかなりの程度で解明することができた。

プロティノス『エンネアデス』における「神に似ること」及び「神」概念の展開事例をテキストから可能な限り析出し、それを得られたプラトンの原型及び他のヘレニズム期諸学派と

比較考察することによって、同時期における同概念の継承の実態と変容の可能性を哲学的に探求することができた。

「神に似ること」のために、いかなる徳が(たとえば、市民的徳と浄化的徳が区別されるように)要請されていたのかを、それぞれの徳が必要とされた文脈と関連付けることによって具体的かつ詳細に跡付けていった結果、本研究の今後の展開に関して大きな示唆を得た。

以上を総括するに、それぞれの領域においては従来から優れた研究が無数にあるが、本研究のように「神に似ること」概念の解明という一貫した観点から総合的、体系的に研究されることは稀であり、まだ序論段階とはいえ、その限りで多いに意義ある成果を得たものと思われる。

(2) 本研究の第2年度として以下の4種の研究成果を得た。

初年度で考証された古代ギリシア世界における「神」観と、古代末期のキリスト教が登場して以降の、とりわけ異教圏における一神教的「神」観とを、代表的文献に基づき比較考察した結果、両者の異同をかなり詳細に跡付けることができた。

プラトン主義の影響を色濃く受けたフィロンやオリゲネスを中心に、プラトン起源の「神に似ること」概念が東方キリスト教圏においても受容、継承されている実態を文献から読み取り、考証できた。

カッパドキア三教父(カイサレイアのバシレイオス、ニュッサのグレゴリオス、ナジアンゾスのグレゴリオス)の膨大な文献群の中からTLGなど電子テキストによって「神に似ること」の用例を検索し、そのすべての用例を文脈に応じて解釈し分けることを試みた。そのような用法分析によって、彼らにおいてプラトン起源の「神に似ること」の伝統がどのように継承され、また変容されていったのかを詳細に調査した結果、それぞれの事例のもつ意味を総合的な見地から解明することができた。

それに伴い、神に似るためにどのような「徳」が要請されたかという論点についても、上記文献調査と並行して、「神に似ること」概念の継承ないし変容過程に応じた徳概念の変容として明確に把握した上で、ギリシア教父に固有な「徳」理解の特定を試みた。

以上を総括するに、古代末期のギリシア哲学と初期キリスト教との影響関係を「神に似ること」概念の解明という一貫した観点から総合的、体系的に研究することは、本邦において従来ほとんどなされておらず、その限りで、2年目にして極めて意義ある成果を得たものと思われる。

(3) 本研究の最終年度として、以下の3種の研究成果を得た。

カッパドキア教父における「キリストに倣うこと」の概念の起源を探求した。従来のMeredith解釈によればニュッサのグレゴリオス『至福について』がその初出箇所とされたが、可能な限りでの文献調査の結果、その解釈の正しさが確認された。少なくとも「キリストに倣うこと」がプラトン起源の「神に似ること」の延長線上に置かれるべき理念であると同時に、キリスト教固有の極めて重要な改変を伴った概念でもあることを当該文献の詳細な解読から明らかにすることができた。

「キリストに倣うこと」のために要請される「徳」の観念と、「神に似ること」のために従来要請されてきた「徳」観念との間には、いかなる相違/連続性があるのか、またそのことによる人間性の完成に関する理念にはどのような相違/連続性があるのか、その点に関して哲学的な面からのみならず、徳倫理的な面からも解明することができた。

カッパドキア三教父の全テキストにおいて、「神に似ること」と「キリストに倣うこと」という二つの鍵概念(及びその派生概念)の相互連関とそれが見出される文脈が、果たして両立可

能な形で併存しているのか、それとも前者から後者への移行が見出されるのか、その点について具体的な用例分布の調査と個々の用例解釈を行なった。その結果、単に語義の上での両概念の繋がりにとどまらず、トポロジカルな「上昇」と「下降」、さらに哲学・神学的には「超越」と「内在」、より具体的には「禁欲修道」と「隣人愛」という思考類型が果たす理念的働きがギリシア哲学からギリシア教父(すなわち東方キリスト教)思想に至る過程でどのように変移していくのかを可能な限り克明に跡付けることができた。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

##### 土橋茂樹

「ある」を表示する「名の正しさ」をめぐる - プラトン『クラテュロス』篇解釈史を手がかりに - (シンポジウム提題:「ある」ことをめぐって - 教父哲学とスコラ哲学) 新プラトン主義研究、査読無、17、2018年、3-9.

##### 土橋茂樹

我々はどこから来たのか、白門(中央大学通信教育部編) 査読無、70-6、2018年、29-34.

##### 土橋茂樹

善く生きることの意味と成立根拠を問う、エイコーン(東方キリスト教学会編) 査読無、48、2018年、53-69.

##### 土橋茂樹

自己投企と受容 - 東方教父起源の「神との合一」概念のトマス再生、ニユクス、査読無、4、2017年、44-60.

##### 土橋茂樹

谷寿美著『ソロヴィヨフ - 生の変容を求めて - 』(司会報告) エイコーン(東方キリスト教学会編) 査読無、47、2017年、3-6.

##### 土橋茂樹

土井健司著『救貧看護とフィランソロピア - 古代キリスト教におけるフィランソロピア論の生成 - 』(書評) 宗教研究(日本宗教学会編) 査読無、91-3(390号) 2017年、157-163.

##### 土橋茂樹

映画「沈黙」を観て、白門(中央大学通信教育部編) 査読無、69-6、2017年、50-56.

〔学会発表〕(計4件)

##### 土橋茂樹

愛の矢と愛の痛手 - オリゲネスとニュッサのグレゴリオス双方の「雅歌」解釈をめぐる(シンポジウム提題) 第162回教父研究会、2017年、東京大学(駒場)

##### 土橋茂樹

善く生きることの意味と成立根拠を問う(シンポジウム提題) 第17回東方キリスト教学会、2017年、南山大学.

##### 土橋茂樹

違和と不在の顕在化に向けて - 主に中世哲学に関わる神崎さんのお仕事をめぐって、神崎繁先生を偲ぶ会、2017年、首都大学東京.

##### 土橋茂樹

「ある」を表示する名の正しさをめぐって、第23回新プラトン主義協会大会、2016年、名古屋工業大学.

〔図書〕(計7件)

##### 土橋茂樹(単著)

中央大学通信教育部、『哲学』、2019年、278.

##### 土橋茂樹、他(共著)

教友社、『愛と相生 - エロース・アガペー・アモル』(宮本久雄編) 2018年、39-64.

土橋茂樹、他（共著）

慶應義塾大学出版会、『光の形而上学 - 知ることの根源を辿って』（山内志朗編）、2018年、27-50.

土橋茂樹、他（共著）

教友社、『テオーシス - 東方・西方教会における人間神化思想の伝統』（田島照久・阿部善彦編）、2018年、40-65.

土橋茂樹（編著）

ヒルトップ出版、『フィロカリア総索引』、2017年、207.

土橋茂樹（編著）

教友社、『善美なる神への愛の諸相 - 『フィロカリア』論考集 - 』、2016年、263.

土橋茂樹（単著）

知泉書館、『善く生きることの地平 - プラトン・アリストテレス哲学論集 - 』、2016年、403.

〔その他〕

ホームページ等

<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~tsuchi/>

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。